

新温泉町に新種チヨウ化石

250万年前地層、1988年に地元高校教諭発見

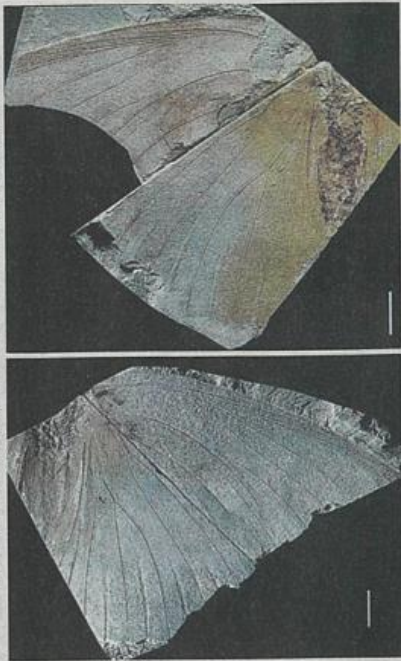
兵庫県新温泉町の約250万年前の地層から1998年に発見され、長らく町内の「おもしろ昆虫化石館」に収蔵されていたチヨウの化石が、タテハチヨウ科オニミスジ属の新種に分類された。慶応義塾の元幼稚園理科教諭（現名誉教諭）の相場博明さんが23日までに、日本古生物学会の英文誌に発表した。

化石は頭部などが欠けているが、胸や腹、羽がよく保存されている。完全な形であれば両側の羽を広げた横幅が84センチと推定され、相場さんは「今までに化石として見つかったチヨウの中では（本来の大きさの比較で）世界最大だ」と話している。オニミスジ属は現代

の日本には生息していないが、東南アジアの熱帯、亜熱帯に分布するという。

兵庫県立浜坂高校教諭だった故・神谷喜芳さんが、山あいに露出していた280万～220万年前の地層からタテハチヨウ科とみられる化石を発見した。昨年、相場さんと慶応義塾幼稚園教諭の高橋唯さんがチヨウの専門家の斎藤光太郎さんとともに詳しく調べ、羽を支える翅脈などの特徴から新種と結論付けた。学名は「タコラ・カミタニイ」、和名は「カミタニオニミスジ」と名付けられた。

相場さんによると、体が軽く、柔らかいチヨウ類は化石として残りにくく、過去に種が分類された化石は世界で43種しかない。



兵庫県新温泉町の約250万年前の地層から見つかったタテハチヨウ科オニミスジ属の新種チヨウ化石（上が背中側、下が腹側）
いずれも相場博明・慶応義塾名誉教諭提供